ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　沈黙が、部屋の中を包んでいた。

　俺、ロランも含めて、樹葉、レイ、詠の全員が、今来たメールの文章を注視している。

誰も言葉を発さないのは、それがあまりにも異例の事態だからなのか、それとも他に何か理由があるのか。

「今月……これで何回目だっけ？」

「確か……四回目、ですね」

　レイの言葉に詠が反応するが、特に驚く様子はない。知ってはいたが、聞かずにはいられなかったのだろう。正直、レイが聞かなかったら、俺が聞いていた。

　脱力、とはちょっと違う何かで、俺とレイは、中空に視線を泳がせる。

今日、『トラース』で、もう一度『ワルキューレ』と『トラース・ブレイカー』の会談が行われることになり、その護衛に俺達が選ばれたのだ。

これはちょっと、異常だ。

「ほぼ週一ペースで任務が来てんじゃん……」

「他の人達は、忙しいのかな？」

　樹葉の言葉に、俺は少し逡巡する。三人はともかく、俺はそんなに隣人と会話をするほうじゃない。会えば挨拶はするが、それくらいだろうか。希に、軽い世間話もするかもしれない。

　だがそれでも、他の仲間が忙しそうには、とても見えなかった。

　受けた任務をペラペラと喋らないのは、『ワルキューレ』の暗黙のルールだ。俺達の方からも詮索はしないようにしている。が、

「ちょっと、聞いてくる」

　レイが、不安そうな顔を押し殺したような声で、小さくそう告げて、部屋を出て行った。

　数十分後。

「……なんか、大変なことになってるっぽい」

　レイが、帰ってくるなり、緊迫したような声でそう言う。

「『ワルキューレ』のメンバー全員に、何かしらの任務が通達されたそうよ」

「ってことは、忙しいのは俺達だけじゃないってことか？」

　俺がそう聞くと、レイはコクンと頷いた。

　それを見て、樹葉も詠も、そしてきっと俺も、少し複雑そうな顔をする。俺達は末端だから、現状の『ワルキューレ』がどうなっているのかは分からない。だから、こんな予想をするより外なく、そしてそれを確かめる術が無い。上の方々から『こうしろ』って言われたら、そうするしかない。

「ロラン、体は大丈夫なの？」

「ああ、問題ない。感覚は戻ってる」

　二本の刀が戻ってきてから、少しずつ体を慣らしていって、最近は以前と変わらない練習が出来ている。こっそり『ヘルズ・ギア』を振ってみたが、ほとんど違和感なく扱えたので、本調子に戻ったと見ていいだろう。

「足でまといにはならないよ」

「ロラン……そんなこと、誰も気にしないよ？」

「俺が気にすんだよ」

「むう」

「まあまあ、樹葉ちゃん。ここは、ロランの意思を尊重しましょ？」

　膨れた樹葉を、苦笑いを浮かべながらレイが宥めた。詠は何も言わず、ただジッと俺の方を見ている。そして、少しだけ口角を上げた。

「詠、どうした？」

「いえ……なんだか、懐かしくて」

「懐かしい？」

「ええ。昔にも、似たようなやり取りがありましたから」

　そうだったかな、と、思い返してみるが、そんな記憶は欠片も浮かばない。

　だが、別に詠が嘘を吐いているわけではないようで、寧ろ俺は、よく覚えているな、と感心した。

「なんで覚えてんだよ」

「大切な思い出ですから。ロランは、覚えていないんですか？」

「全然。まあ、これからは覚えていくさ」

　そう言うと、少しだけ笑みが溢れるのが自分でも分かった。

　それは詠も同じようで、

「心配しなくても、今のロランなら、自然と記憶に残りますよ。大切な思い出って、そんなものでしょう？」

「そんなもんか？」

「そんなものです」

　詠はそう、言い切った。

　任務開始は、明日の夜七時。

　少しだけの笑顔を、俺は、真面目なものに変えた。

「ユニット名を決めましょう」

　真面目な顔に変えた数十分後。レイが突然、そんなことを言い出した。

「……こんな時に、何を言っているんだ？」

「ユニット名を決めるのよ」

「あー、今までデフォルトの適当なやつでしたからね」

「そうだねー、決めちゃおうか」

　なぜ今、と、なんで同じことを繰り返すんだ、という疑問の、どちらを最初にぶつけるべきか少し悩んでいると、詠と樹葉がやってきて、そんなことを言う。もう反論する空気ではなくなってしまい、仕方なしに、俺もレイの話に乗っかった。

「取り敢えずさ、私達の名前からとらない？　レ、ロ、い、よ、この四文字を組み合わせて、いいの出来ないかな？」

「出来ねーだろ。ダサすぎるわ」

　レイのネーミングセンスが、素人目にもイマイチだってことは良く分かった。

「どうせなら、ローマ字の頭文字にしろよ」

「えー、それじゃ普通じゃん」

「いや、レイ……普通につけましょうよ……」

「うっそ、詠ちんまでっ？」

「私も、レイちゃんの決め方はちょっと」

「四面楚歌っ！」

「それほど壊滅的なんだよ、レイの決め方は」

「ロランちょっと辛辣すぎないっ？」

　いいえ普通です。

「せめて、頭文字のアルファベットとかにしませんか？」

「じゃあ、レイちゃん、詠ちゃん、ロラン、私なら、Ｒ、Ｙ、Ｌ、Ｉかな？」

「あの、樹葉。前から思っていたんですけど、僕、男ですよ？　なんでレイと同じく『ちゃん』付けなんですか？」

「詠、諦めろ。議論の余地はない」

「ロランっ？」

「アルファベットかぁ。樹葉ちゃんのだと……どう並べ変えればいいんだろ？　やっぱ、リーダーである私の『Ｒ』を先頭に――」

「ロラン、私、レイちゃん、詠ちゃんの順番で、『ＬＩＲＹ』とかどう？　読み方は『リリー』で」

「ちょ、樹葉ちゃんっ？　それじゃ私が先頭じゃないじゃん！」

「それの一体何が不満なんだ……」

「あの、三人とも、何事もなかったかのように話を進めないで下さい！」

　色々文句は聞こえてきたものの――一人チーム名とはなんの関係もない文句もあったが――『ＬＩＲＹ』以上の案は出てこず、一番文句を言っていたレイも、何度か『リリー』って呟いていたら、少しではあるが気に入って来たようで、結局俺達のユニット名は『ＬＩＲＹ』に決まった。

　無事にユニット名も決まり、俺は自分の部屋で一人、机に向かっていた。考え事があったのだ。

「…………」

　考え始めてから、どれくらいの時間が経っただろうか。そう思って、ふと時計を見ると、二十分経っていた。結構長い間、考え込んでいたようだ。

　だが、たっぷり時間をかけたお陰で、考えは纏まった。少し前から感じていた疑問が――自信満々というわけではない。間違っていたらと思うと、とても怖いのだが――解決したのだ。

　俺は、とあることを決意して、部屋を出た。

「みんな、準備はいい？」

　レイの言葉に、俺達は黙って頷く。支度を終え、後はお姉様と木藤さんを待つだけだ。

　だが、二人が来る前に。

「なあ、みんな。ちょっと話があるんだけど、いいか？」

　俺は、先ほどの決意を、実行に移した。

　時間まで、後二十分。

ここにくるのも、久しぶりだ。

　いつもなら思わないようなことを、俺は思って、周りを見渡す。

　俺の周りには、お姉様と木藤さん。そして、樹葉、詠、レイの、頼りになる仲間達がいる。

　たった数週間。前回来てからそれくらいしか経っていないのだが、体感では、今までで一番長い期間、ここ、『トラース』に来ていなかった気がする。

　クラスタの輝きが鈍く、さらに俺達の今いる場所は岩壁に囲まれているためか、視界がやや悪い。

「皆さん。気を付けて下さい。もう既に、囲まれています」

　お姉様の言う通り、敵に囲まれている気配は丸分かりだった。明らかに、「話し合い」をするような雰囲気ではない。

　俺は、ちらりと後ろを振り返る。詠と樹葉が頷いた。そして、前を見る。レイが後ろを振り返って、同じように頷いた。

　勝負は、ここからだ。

　いつものように、耳に心地の良いＢＧＭが流れて……おや？

「……あれ？　これなんだ？」

　俺はその音が、耳に付けたインカムから聴こえてくることに気がついた。

「音なんて、鳴ってたっけ？」

　そして俺がその疑問を口にした瞬間、レイがバカを見るような目で俺を見た。

「ずっと前からあるじゃん……」

　え、嘘っ？

「やっぱり、ロランは気がついていなかったんですね……」

「そんな気はしてたけど……それが本当だと、結構くるのがあるね」

　詠と樹葉までもが、どうやらこの音に気がついていたらしい。

「ていうか、最初の時に詠ちゃんが説明してたじゃん」

「え、そんな説明あったけ？」

　全く記憶にない。

「しましたよ？　だってこれ、僕が作ったＢＧＭですもん」

「『いい音は、身体能力を上げるんです！』って、詠ちゃん自慢気に言っていたよね」

　どうやら本当に、説明はあったらしい。

「『早く俺に刀を振らせろ』って顔しながら、目線は敵の方に向いていたからね」

「ほんとマジすいませんでした……」

「ふふふふふ」

　ふいに、お姉様のそんな笑い声が聞こえてきた。

「ごめんなさい。少し、昔の自分を思い出しただけです」

　昔の自分……そう言えば、お姉様も俺と同じように、家出したんだっけ？

「さて、皆さん」

　俺がそんなことをふと思った時、お姉様がそう続ける。

「まだ武器は抜かないように。私達は、話し合いをしに来たのですからね……ただし、警戒はしていて下さい。何かあれば、あなた方だけでもすぐに逃げること」

「……お姉様をおいて、ですか？」

「お姉様の命令です。おとなしく従いなさい」

　レイが不服そうに言うと、木藤さんが厳しい口調で諌める。

　そんな彼を、レイはひと睨みして、それでも不承不承といった様子ではあったものの、小さく「はい」と返事をした。

「……行きましょうか」

　その言葉を受けて、俺達は進む。一歩ずつ、一歩ずつ、慎重に。

　俺は、お姉様の斜め後ろを歩きながら、目線は敵の方ではなく、ずっとお姉様の首筋辺りを見つめていた。刀の柄に、いつでも手をかけられるように準備しながら。

　そして。

　お姉様の車椅子が、ゆっくりと止まり始め、俺はお姉様よりも少し前に出る。

　レイは既にお姉様の前にいた。俺に続いて、お姉様の後ろにいた樹葉と詠も、車椅子を追い越していく。

　後に残るのは、車椅子に乗るお姉様と、それを押す木藤さんだけ。

　ＢＧＭが、少しだけ不穏なものに変わっていく。

「――っ！」

　そして俺は、行動を起こした。

　歩幅を少しだけ狭めて、体をひねり、同時に刀の柄に手をかけ、勢いよく鞘から黒い刀身を抜き出す。

　ちょうどＢＧＭが盛り上がりになるところで、音が、響いた。

　カキンという、高めの音。

　俺の『ヘルズ・ギア』は、お姉様の首筋のところにある。

　だが切っ先は、首とは真逆の方向に向いていた。俺は斬りかかったのではない。受け止めたのだ。

　木藤さんの手に握られていた、小型のナイフによる、お姉様の首に向けられた一撃から。

「――っ？」

　木藤さんは、その光景が信じられないかと言いたげな様子で、だがしかしすぐに現実に戻ったかのようにハッとして、すぐに俺達から距離を取る。

「……貴様」

　底冷えするような声色で、木藤が呟く。

「何故……何故だ？」

「何故？　それはこっちの台詞ね。ワルキューレの一員でありながら、お姉様に対して随分非礼がすぎるんじゃない？」

　レイが、そう言いながら俺の後ろから斧槍を構えつつ前に出る。

「……どこで気がついた？」

　そんなレイを無視して、木藤は俺に向かって聞いてくる。きっと、バレるなんて思ってもいなかったのだろう。

　俺は、色々言ってやりたいことを一先ず胸に押し込んで、静かに口を開いた。

「……闘悟のお陰、かな？」

「何？」

「俺が最後に闘悟と戦った時……あいつの仲間がさ、闘悟のことを『トーゴ』って呼んでいたんだよ」

　気絶する寸前でのことだったから、正直今でもあの時の記憶は曖昧だ。だが、そこだけは間違いない。

「最初は、闘悟は俺を裏切ってまで名前を変えて、『トラース・ブレイカー』に入ったんだと思った。でも、名前を変えるなら、どんな風に変えたとしても、その読み方を『とうご』になんてしないはずだ。

　だから、あいつの仲間が闘悟を『トーゴ』って呼んでいたことに、俺は凄く違和感を覚えたんだ」

　それに気がつくまでに、少し時間はかかったけどな、と、俺は苦笑してそう続ける。

「そこでやっと気がついた。あいつは『トラース・ブレイカー』に所属しているけど、名前までは変えなかったんだって。そしたら、また疑問が出てきた。『あいつはどうして、名前を変えなかったんだろう？』ってな。だって、名前を変えなきゃ、俺に知られるんだ。自分がこの世界を壊そうとしていることが。それを俺が知ったら、どんな反応をするのかだって、想像できたはずさ。

　まあ、名前を変えたら変えたで、いつかは俺に気づかれるんだけど……それでも、名前を変えておけば、自分がどこのチームに所属しているのかは、しばらく隠せる。場合によっては、俺を利用できるかもしれない。でもあいつは、それをしなかった」

　もしかすると、何か理由があって『トラース』を壊そうとはしているのだろうけど、あいつは俺を裏切るつもりなんて、最初からなかったのかもしれない。

　だとすると……俺が今まで抱いていた感情は、一体何だったのだろう。そう思うと、今までの自分が急に阿呆らしくなるのと同時に、それが少しだけ嬉しかった。

　俺は、俺が思っている以上に、闘悟ともう一度、昔みたいな関係に戻りたいと思っているらしい。

　俺は、自嘲気味な笑いを少しだけこぼす。

「闘悟が名前を変えていないのなら、俺はなんであいつの名前を見つけることが出来なかったんだろう？　そこでやっと分かったよ。俺は本当の意味で、闘悟の名前を探してなんていなかったんだ。だって、俺はあいつの名前を紙に書いて、他人に探してもらっていただけなんだからな。そうだろう？　木藤」

　他の『チーム』の名簿は、基本的にはチームリーダーが受け取り、他人の目に触れることはない。重要な個人情報なので、チームリーダーだけが名簿を管理し、口外しない。それが暗黙のルールだからだ。

　だが、『ワルキューレ』だけは例外だ。なぜなら、お姉様は目が見えないから。紙に書かれた名簿を見ることができないからである。側近である木藤か絵里さんが名簿の管理者であり、俺が『ワルキューレ』に入ってすぐに、絵里さんは別の『ワルキューレ』支部に出張した。

つまり――

　俺は闘悟の名前を、木藤にしか探してもらっていない。

「……動機はなんだ？　俺が君に嘘を吐く理由は？」

　往生際悪く、木藤は俺にそう尋ねる。

「……こいつら、だろ？」

　俺は、手に握られた『ヘルズ・ギア』に、一瞬だけ目を落とした。

　そして、腰にぶら下げている『ヘブンズ・ギア』がカチャリと鳴る。

　何でも斬れる白き刃に、恐ろしい程硬い黒き刀身。

この二本の刀は、刀にあまり詳しくない俺でさえ、その価値が分かる。

「自分の『チーム』に持って帰れば、この上ない戦力強化になるだろうよ」

「同時に、君が持っていても、宝の持ち腐れにしかならない」

「……っ」

　そんなこと、言われるまでもない。俺はまだ、この二本の刀を使いこなせていないのだ。刀に振り回されている、と言ってもいい。

　だがしかし、実際に口に出されると、腹の底からフツフツと湧き上がるものがあった。

　樹葉達も同じ気持ちらしく、武器を持つ手に力が入る様子が感じられる。

「おとなしく、その刀をこちらに渡す気にはならないかい？　我々なら、君よりももっと上手くその刀を使うことが出来る。その方が、刀にとっても幸せ――」

「木藤、そこまでにしておきなさい」

　そろそろ何か言い返そうと思った時、それを制すようにお姉様の言葉が入った。

　お姉様の方を見ると、お姉様はゆっくりと、車椅子を動かして木藤の方に向いていた。

「確かにロランは、まだ本当の意味ではこの二本の刀を使いこなせてはいません。この子はまだまだ未熟で、幼く、本質を忘れて過ちを犯してしまう中学生です。

　が、しかし」

　そこでお姉様は言葉を切る。その瞬間――

　空気が微かに震えた。

　ここにいる俺達は、知る。

　目も見えず、車椅子での生活を余儀なくされているお姉様が、何故いまだに『ワルキューレ』のトップに君臨されているのかを。

「あの二本の刀を、戦いのためにしか使えないような方に渡すことは出来ませんね。それこそ木藤。貴方の言う『宝の持ち腐れ』と言うものです」

「……っ、黙って聞いていれば好き勝手に……」

　軽く舌打ちして、そう吐き捨てるように言った木藤の袖から、なにやら金属のようなものをのぞかせた。

　その瞬間、お姉様が僅かに身構えるのを見て、俺達四人は後ろに飛び退く。

　轟音と共に白い煙があたり一面を覆い、機械の動くような音がした後、俺はようやく、何があったのかをしることが出来た。

　目の前には、全長三メートル程の白いロボ――と形容して良いのか、俺は悩む。俺のイメージするロボットとは、全く外形が異なるからだ。

　ロボの中心に、むき出しになっている木藤の両手両足から、何本かの白いパイプが伸びるようにロボの両手両足に繋がっており、これはどちらかと言うと……

「強化スーツ……みたいなもの、かな？」

　レイが俺が思ったことを、そのまま口に出してくれた。

「おいおい、ありゃ何だっ？　こんなの話に聞いてねーぞっ？」

　そんな声が後ろから聞こえる。俺達『ワルキューレ』のものではない。

　振り返れば、『トラース・ブレイカー』の奴らが逃げていくのが見えた。

　そんな中、誰かがこちらに向かってくるのも見える。あれは……あいつは……

「闘悟っ？」

「ロラン！」

　やってきたのは、俺の親友だったやつだった。

　闘悟はこっちまで走ってくると、俺の背中をバンっと叩く。

「お前、謹慎解けたんだな！」

「ああ……って、何でお前が知ってるんだ？」

「あ、やべっ――いや、えーと、まあ、いいじゃねーか。そんな細かいことは。それより、あいつを何とかするのが先決じゃねーのか？」

　そんなことを言った闘悟が、ちらりとレイの方を見たことを俺は見逃さない。取り敢えず後でレイに問い詰めるとして……俺はそれ以上に、今の言葉で気になるところがあった。

「闘悟、お前、手伝ってくれるのか？」

「たりめーだ。そのために来たんだからな」

　何でそんな……と、言いかけて、俺はそれをグッと飲み込む。

　こうやって闘悟と話してみて、俺は気づいたのだ。きっと、闘悟は俺を今でも『親友』だと思っていることに。きっと、こいつにしてみれば、俺が別の『チーム』の人間だろうが、関係ないのだろう。

　で、あるならば、だ。

　俺は俺で、しっかりと言わなければならないことがあるはずだ。

　俺は、闘悟の拳に視線を向ける。指が一本欠けていた。それを見ると、胸がキュッと締め付けられるような、そんな罪悪感がこみ上げてくる。

　俺は大きく息を吸い、そして、

「なあ、闘悟」

「ん？　どうした？」

「その、すまなかった。謝って許してもらえるとは思ってないけど……木藤を倒したら、その償いをさせて欲しい」

「指のことか？　なら、気にすんな。俺が弱かった。ただそれだけのことだからな……っつても、お前は納得しねーよな」

「ああ、もちろんだ」

　そして、俺は今度は木藤に向き直る。

「お姉様への攻撃……もう言い逃れは出来ないぞ木藤。『ワルキューレ』を乗っ取るつもりなのか、それとも他の『チーム』の差金か……全部吐いてもらう」

「よく言ったロラン！」

「微力ながら、僕も全力でお手伝いします！」

　俺が『ヘルズ・ギア』の切っ先を木藤に向けると、レイも同じように斧槍を構え、詠がそれに続けてそう言った。

　そして、俺の背中に、そっと手が触れる。

「背中は心配しなくていいよ。ロランは全力で、ただ前を見て、私達と……皆と一緒にあいつをやっつけて」

　樹葉がそう俺に囁いた。

　俺は頷いて、そして、

「闘悟、いくぞ」

「おぅ、ロラン」

　俺と闘悟は、二人揃って前に出た。

「ロラン。『ヘルズ・ギア』を貸して頂けますか？」

「え、お姉様？　それだと、俺は何を使えば……？」

　お姉様の言葉に、少し嫌な予感が頭にちらつく。

「もう一本、刀があるでしょう？」

「で、でも……」

　それが的中した俺は、その『もう一本』を見る。

「皆さんが木藤を攻撃する必要はありません。彼には、私自身が引導を渡します。

　ただ……それをするには、少しばかりあの強化外装が邪魔なので、皆さんにはそれを取り除いて頂きたい」

「な、なあロラン。この人って……」

「ああ。目が見えない」

「でも、何であいつが強化外装を纏ってることを知ってんだっ？」

　うん、闘悟。その気持ちは分かるよ。凄く分かる。でもな、

「ま、それがお姉様だからさ」

「は、はぁ？」

　この人くらいのレベルになると、俺みたいなのとはもう違う次元の話なんだよ。

「ふふふ、あなたが闘悟さんですね？」

「え？　あ、はい」

　急に話しかけられ、闘悟は困惑した様子で返事をする。

「いずれ機会を見て、一緒にお話をしましょう。昔のロランの話を、色々聞かせて下さいね。きっと、あの子達もそう思っていますから」

「あー、お姉様っ？　そういえば刀でしたよねっ？」

　何だか話がおかしな方向に行き始めて、俺は慌ててお姉様に『ヘルズ・ギア』を押し付けるように渡す。

　お姉様はクスクスと笑ってそれを受け取ると、『ヘルズ・ギア』を片手で振り回す。

　やっぱスゲーな、お姉様……と思いながら、俺は『ヘブンズ・ギア』を取り出して、両手で構えた。隣で、闘悟が両腕を胸の高さにまで掲げる。レイや樹葉も、それぞれの武器を構える気配がした。

「さあ……行くよみんな！」

　レイの号令と共に、俺達は地面を蹴る。その瞬間、耳に心地の良い、ある意味聴き慣れたＢＧＭが流れてくる。

　俺達が隙を作るのを待っているのだろう。お姉様は動かない。

「――っ！」

　目の前に振り下ろされるアームを、俺は『ヘブンズ・ギア』で迎え撃つ。

　互いの攻撃がぶつかり合う瞬間、木藤の方がアームを引っ込めた。

『ヘブンズ・ギア』に、斬れないものはない。

　木藤はそれを分かっているから、正面からの衝突を避けたのだろう。

　そう思った俺は、少し甘かった。

「ふんっ！」

「何っ？」

　上からきた攻撃は、一旦引っ込めたと思った次の瞬間には、既に横からの攻撃に切り替わっている。フェイントだ。

「もらった！」

　木藤の勝ち誇る声。

　完全に引っかかった俺に、それを躱す術はない……というのは、もう昔の話である。

　アームの一撃がヒットする寸前、俺の頬を何かが高速で通り過ぎ、小さく爆発する。アームは弾かれたように吹っ飛んだ。釣られて体勢を崩す木藤。

「樹葉！　よくやった！」

　後方にいる彼女に、俺はそう叫んだ。

『』があるから、長期戦は危険だ。戦闘を始めてから、すでに三十秒。後一分でケリをつける！

「この白い刀身は、お前の魂を、痛みより早く浄土へ還すっ！」

「何ぃっ？」

　少し隙の出来たアームを、俺は『ヘブンズ・ギア』で切り落とした。

　隣では、同じようにアームの猛攻を凌いでいるレイと、強化スーツの足元を攻撃している闘悟の姿が映る。だが俺がアームを切り落としたために重心が偏り、ガクンと下に落ちた。

　レイはそれを見逃さない。

　斧槍を上から叩きつけるように振り下ろし、そして素早く掬い上げる。

「せやぁぁぁあっ！」

　さらに横から、回転の勢いで斬りつけて、アームを付け根から吹っ飛ばした。

　そして――

「おらぁぁぁあっ！」

　闘悟が強化スーツの足元に強烈な蹴りを入れて、木藤のバランスを崩す。

「ちょ……調子に乗るなぁぁぁあっ！」

　倒れながらも木藤がそう叫ぶと、再び強化スーツから白い煙が噴出し、視界を覆った。

　だが、

「――っ」

　その煙は、一瞬にして切り払われる。

　見なくても分かる。お姉様の一閃だ。

　だが俺がそう思った瞬間には、お姉様の車椅子が俺の脇をものすごい勢いで通り抜けていった後だった。

　そして――

　漆黒の刀身が、自由に動けなくなった木藤の腹に一発。続いて背中から一発、さらに脇腹を左右から一発ずつ。僅か数秒で、その四擊が全てヒットした。

　いや、見えていたのがそれだけだったので、もしかするともっと攻撃していたのかもしれない。

　そんなあやふやな認識で捉えている間に、お姉様の攻撃は終わっていたのだ。

「――っ、かはっ」

　大きく開いた木藤の口から、大量の唾と吐瀉物がまき散り、ゆっくりと彼の体が倒れていく。

　完全に倒れた木藤の体が、少しピクピクと動いていた。どうやら、気絶しているだけらしい。

　あれだけの攻撃を受けて死んでいない彼を褒めるべきなのか、それとも手加減したお姉様が凄いのか……俺はちょっとだけ考えて、そしてそれを止めた。

　どう考えても、俺じゃお姉様が凄いとしか思えなくて、考える意味はないと気がついたのだ。

　そして同時に、そんな思考よりももっと大切なこと。

「ロランっ！」

　俺の背中から抱きついてくる樹葉を感じながら、でもそれは長く続かなかった。

「おっしゃぁぁあっ！」

「やりましたね！」

　レイと詠の二人が、俺と樹葉の元に駆け寄ってくる。

　そんな中、

「……どこへ行くのですか、闘悟さん？」

「あんた、実は目が見えてるんじゃないのか……？」

　闘悟だけは、静かにその場を去ろうとしていた。

　完全に気配を消していたので気がつかなかったが、お姉様には通用しないらしい。

　だが、やがて突っ込むのを諦めたように、鼻から息を長く吐いて、口を開く。

「空気を読んだだけだ。あそこには、違う『チーム』の俺がいるべきじゃない。用事は済んだんで、俺は俺の居場所に帰ります」

「……俺は、別に気にしない」

　闘悟の言葉に、俺はボソッとそう呟く。

「怪我をさせた件もあるし、今回のこともある。せめて礼はさせてくれ」

「別に、すぐにしなくてもいいっての」

「借りっぱなしってのは、何か嫌なんだよ」

「ったく。変なところで頑固なのは変わんねえな……」

　やれやれと闘悟は溜息を吐く。失礼なやつだ。

「今も昔も、そんなに頑固じゃないっての」

「そう思ってんのはお前だけだっての。大体、俺とロランのいる『チーム』は、そもそも活動方針が真逆なの忘れてないか？」

「う……」

確かに闘悟の言う通りだ。俺はお姉様が黙認して下さっているからいいけど、闘悟はあまり、俺達と仲良くしているのを見られたくはないだろう。

「まあ、私達って敵同士だし、そこは仕方がないんじゃない？」

「難しいところですけどね……仕方ありません」

「……お礼は、また今度にしよ？」

「……分かったよ」

　理屈は分かっていても、納得は出来そうもないが、仕方ないものは仕方がない。

　溜息を吐くように、俺はそう呟いた。

「一応、互いの『チーム』の迷惑にならないようなお礼は考えておくから、心配すんなっての」

　苦笑いしながらそう言って、闘悟は踵を返した。

「今度会うときは……いや、何でもない。じゃあな」

　何かを言いかけて、闘悟は去っていく。

　その後姿を、俺は見えなくなるまで見つめていた。

　何も言われなかったのは、皆、空気を読んでくれたのだろう。

　そして、完全に見えなくなった時、

「では、帰りましょうか」

　お姉様のその言葉に、俺達は頷いた。

　こうして、戦いは終わった――